

音楽再生を心底楽しむためのあれこれ

プロローグ

何故このような文章を皆様に読んでいただきたいのか？

それは、お気に入りの音楽を普通の日常生活の中で心底楽しんで聴ける環境は必ず生活を豊かにしてくれるはずだという信念に基づいています。

例えて言うなら、音楽は料理の食材としてのトマトのようなもので、主食ではないのですが、西欧料理、日本料理を問わず食文化を豊かに彩ってくれます。

トマトの品種は何千種もあり、用途により使い分けられているそうです。さらにまだまだ新しい品種が生まれる可能性もあるとのこと。

音楽の世界でも、昔からある定番以外にこれから新しいタイプの音楽が生まれる可能性は十分あるのではないのでしょうか。

一般の人々にとり音楽は決して生活の最重要な部分ではありませんが、日常的に良いサウンドに接することは人間が本来持っている感性にとり必ずプラスになると思います。

戦後、例えばジャズの場合、ジャズ喫茶が全盛を極めた一時期がありました。当時、一般の人にとってレコードの入手は難しくネット通販もなかった時代のことです。しかし時代環境はがらりと変わりました。今では昔のジャズ喫茶以上の事が自宅で出来てしまいます。ジャズ喫茶の役割は「ジャズを聴かせる場」から「ジャズを語り合う場」へ変わるべきだったのかもしれませんが。

話しが少々脱線しますが、多くの人が日常的に接しているのはテレビの音声です。このテレビの音声を改善することは大変有意義なことです。

現在でも NHK は E テレでクラシック音楽を、BS で歌謡曲などの番組を放送しています。地上波がデジタル化されて、テレビの音声は昔のアナログ時代とは違い大変高品質になっています。

例えばボーズ(BOSE)社には TV 用音声システムとして“Solo TV sound system” (¥42,000) という製品があります。これは通常の液晶 TV の下に台座のように設置し、光ケーブルで TV と接続するというものです。単なる音環境の改善ならこれで十分だと思われます。

しかし本論では不特定多数のサウンドについての音環境の改善ではなく、それぞれの人にとり特別な存在のミュージシャンの音楽と向き合うための音楽再生環境について述べさせていただきます。

なお、本論では音楽再生の世界のアナロジーとして料理の世界が度々登場することに

なるだろうと思います。

両者はとてもよく似ています。料理の世界に例えてご説明すると分かり易いということがその理由です。

I 誰の演奏を聴きたいのか特定する

これは「仮決め」でもいいのです。特定のミュージシャンに対し「選択と集中・・・そして継続」する事により得られた経験は他のミュージシャンに焦点を当てた場合にも必ず役立ちます。

特定のミュージシャンについて「ある高み」までいくと他が見えてきます。

よくある話ですが、「ご趣味は？」と聞かれて「音楽鑑賞」と答えた場合、対象が音楽全般ということはまずありません。想定されている音楽ジャンルはクラシックであったり演歌であったりジャズであったりします。

しかし音楽全体からみればかなりマイナーな存在のジャズですら、その内容はかなり広大です。

ここでは音楽再生の対象を特定のミュージシャン（音楽家）にまで絞り込んで話を進めたいと思います。

「私は演歌なら何でもいい」という方もおられるかもしれませんが、ここでは便宜上、対象となるミュージシャンを特定していただかなければなりません。

と言いますのは、本論で述べる手法はミュージシャンが変わっても同じだからです。

絞り込むための手段としては、現在では各種音楽サイトで **MPEG3** レベルでの試聴が出来ますので、それらを活用していただければよいのではないのでしょうか。

昔のようにリスクをおかしてまでレコードや **CD** を購入する必要はありません。

また、いわゆる名盤・名演奏の類について。個別の演奏から受ける印象は人それぞれです。あくまで参考程度にされたらいいと思います。何よりもまずご自身の感覚を信じていただきたいと思います。

II 音源探し

さて、音楽再生の対象となるミュージシャンが一応定まりました。

そうしますと、次はそのミュージシャンに関してどのような音源が入手可能なのか？

これが重要なポイントになります。

「どのような音源を再生する必要があるのか？」により音楽再生装置の仕様も変わってくるからです。

そして、適切な音源を探すことを料理の世界に例えると、料理人（店）を選ぶことに相当します。同じ料理でも料理人が異なれば味が違ってきます。

録音されたばかりの演奏は作品としての曲・アルバムを制作するための素材、料理の世界の食材に相当します。食材が良いことに越したことはありませんが、良い食材を使ったからといって良い料理が出来るとは限りません。食材を活かすも殺すも料理人の腕次第です。何しろ音に対する特性がマイクと聴覚では違うから大変です。

録音された素材を編集（マスタリング）して音楽メディアに記録するわけですが、このマスタリング・エンジニアはいわば「第一の料理人」です。

パッケージにされた演奏は冷凍食品のようなもの、「第二の料理人」（これは演奏の聴き手である皆様です！）により解凍され、調理されてようやく料理として最終的に完成することになります。

さて、対象となるミュージシャンが過去に活躍してもう既に亡くなった人なのか、現在活躍中のバリバリの若手なのかによって音源探しの難易度はかなり違います。

後者の場合、しかも日本人ならば音源探しには全く苦労しません。現在発売されている音源しかこの世には存在していないからです。

ただし外国のミュージシャンの場合は海外のレーベルを音源として採用すべきです。

日本のレコード会社が海外のレーベルから音源を輸入してリマスタリングしたような音源は避けた方が無難です。これはいわば日本料理の料理人がフランス料理を作るようなものだからです。

音源探しに少々苦心が必要なケースは、対象となるミュージシャンが活躍した年代が“現在”ではなく“過去”の場合です。その年代が何時頃なのか？によって探すべき音源が変わってきます。

押さえておかなければならない事項は次の4つです。

- 1 1950年頃からモノラル録音のLPレコードが一般的になる（最初は10インチ、次に12インチ）。
- 2 1958年頃からステレオ録音のLPレコードが出現する（1968年頃までは同じアルバムがモノラル録音とステレオ録音で並販されていたりします）。
- 3 1982年にCDの規格が発表され、新発売されるアルバムは順次CDオンリーとなっていく。また以前のLPレコード作品がCD化されていく。
- 4 ただし、現在でもそうですが、アナログレコードについては再発盤という世界があります（特に欧米で）。

例えば1950年代に米国で活躍したジャズ・ミュージシャンが対象なら、米国もしくは欧州で制作された再発盤、あるいは（高価になるかもしれませんが）オリジナル盤を音源とすべきです。

なお、この場合もそうなのですが、先に述べたように日本の大手レコード会社が音源を

輸入してマスタリングしたレコード（1970年代に多い）は避けましょう。

くどいようですが、日本料理の料理人にフランス料理のテイストが分かるはずがない、また逆も然りです。

また、再発盤かオリジナル盤か？ですが、再発盤を探しても見付からない場合は仕方なくオリジナル盤を探すことになります。

しかしオリジナル盤は高くつきますし、そもそも中古ですから盤が痛んでいるリスクが高いのです。

どうしてもという場合以外は輸入 CD で代用することをお勧めします。

なお、CD の音質はデジタル臭いと嫌われる方がいますが、音楽信号の記録媒体としての CD は、特に S/N 比など、塩化ビニールのレコードよりはるかに優秀です。

問題があるのは記録媒体としての CD ではなく、CD に記録されるサウンドそのものです。例えば「デジタルリマスタリング」をする場合、マスターテープのノイズを消したり様々な加工が出来ますので、結果として元々のサウンドが不自然な加工食品のようになってしまうことがよくあります。

これも余談ですが、CD で聴くビル・エヴァンス（ジャズ・ピアニスト）のサウンドは滑らかです。しかし同じアルバムを再発盤のアナログレコードで聴くと、そのタッチやサウンドの荒々しさに驚かざるをえません。一体どちらがビル・エヴァンスの本当のサウンドなのか考え込んでしまいます。たぶん後者が「正しい」のですが……。

III 再生装置

音楽再生装置は音楽を再生するために大切な存在です。しかしあくまでそのための道具立てだという立場で考えます。道具の使い手としてそれなりの注意を払う必要がありますが、専ら「音質」に関心があるオーディオマニアの立場とは違います。

スタンダードで無理のない、しかも音楽再生のために十分な性能を有する装置については多くを語る必要はないように思えます。

実績がある日本のメーカーの実績がある製品シリーズの最下位モデルで十分です。

機能的にもまず問題はありませんし、コストパフォーマンスも抜群です。

最下位モデルといっても、長い年月をかけて磨き上げられてきたこれらの製品は皆様が想像する以上の性能を持っているのではないかと思います。

ただし、対象となるミュージシャンの音楽の雰囲気 matches した製品デザインとなると、日本製品はいわば没個性・八方美人ということでお気に召さないかもしれません。

例えば「ダン・ダゴスティーノ」のアンプ類があります。値段はベラボーに高いのですが、音質がどうのこうののではなく「雰囲気を買う」ということならそれはそれでアリだと思

ます。

もし対象となるミュージシャンがジャズという音楽ジャンルに分類されている場合、ひと昔前は JBL の 43 シリーズのスピーカーにマッキントッシュのアンプがジャズファンの間では定番でした。ジャズの世界では何しろ「ブルー」という言葉が頻繁に出現します。そうしますと、JBL43 シリーズのブルーのバッフル板、マッキントッシュのブルーアイズは雰囲気ぴったりで。

さて、音楽再生装置に本来の性能を発揮してもらうために、第二の料理人である「使い手」としては最低限、次のことがらに留意していただきたいと思います。

まず個別の機器を接続するケーブル類についてですが、ひとつ留意していただきたいことがあります。それは銅より銀、銀より金が高価だから高価な材質のケーブルを使えば装置全体が高音質になるかということ、決してそういうことではないということです。

一番無難な方法は同じような材質のケーブルでシステム全体を組み上げることです。例えば機器側が 5N の銅線が主体ならケーブルもこのグレードの方がいいということです。ちなみに 5N 銅線というと純度がファイブ・ナイン、99.999%の銅を意味します。皆様が「純金」といっている金の純度は 4N、すなわち 99.99%ということになります。なるべく異種金属を間に挟まない、同じような純度と結晶粒形のケーブルで接続していくことが電気信号のスムーズな伝達をもたらします。

次に、機器群の中で一番問題になるのはスピーカーですが、小口径のウーファーしか持たない小さなブックシェルフ型でも、実用上全く問題ないサウンドを出してくれます。

ひと昔前は大口径のウーファーを持つスピーカーでないと「正しくない」と言われていました。ピアノの最低音(A音)は大体 27.5Hz ですが、この音域を使う演奏というのは滅多にありません。その倍音(50Hz 前後)まで出れば十分です。15 インチ (38cm) のウーファーがなくとも大丈夫です。

老婆心ながら、小さなブックシェルフで OK ですが、スタンドが必要になる場合は低音再生がより有利になり、地震対策上も安全側になるトルボーイ型がお勧めです。

最後に音楽再生装置全体の振動制御です。

一応、設置されたスピーカーから床に振動が伝播するという前提で考えます。

この場合、特にアナログレコードプレーヤーや真空管アンプにはスピーカーからの振動が伝わらないようにインシュレーションをすべきです。

どのようにインシュレーションをすべきか?については次の原理原則に従います。

それは「音響インピーダンスが異なる材(空気も含みます)の境界面では音振動の反射が生じる」ということです。

音響インピーダンスが異なる材を積層すれば立派なインシュレーターとなります。

例えば水中に潜っている人に向かって、船の上から「オーイ」と叫んでも水中の人にはまず聴こえません。これは空気と水の音響インピーダンスが桁違いだからです。

しかし船べりを何かで叩いてやれば、その音は水中の人によく伝わります。

ちなみに「音響インピーダンス」とは「材の比重×材の音速」です。

こうした観点からみて適切なオーディオラックに機器を設置するとよいと思います。

高価なオーディオラックでなくともOKです。

なお再生装置の検討をする際、つついオーディオ雑誌を参考にしたいくなりますが、これは余程経験がある方以外にはお勧めできません。

何故ならば、オーディオ評論家の文章の裏の裏まで読み解くことが大変難しいからです。

そもそもオーディオ評論家は同時にハイエンド・オーディオマニアであり、こと装置に関しては一般人とは次元の異なる経験値をお持ちです。

しかしその仕事で生計を立てているという制約がとてもキツイわけでした、オーディオ業界と利害関係が無い第三者的立場には決してなれないという事情があります。

IV 室内音響について

お終いは室内音響についてです。これについては、特別な吸音・反射の仕掛けは余程のことがない限り必要無いと思います。

通常の生活に必要なもので音波の拡散反射が出来ていればそれで十分です。

気になることがあるとすれば、部屋の「防音」「遮音」かもしれませんが、これはその殆どが部屋の空気漏れに原因があります。窓・ドア・コンセント・壁と床の接合部などです。これらの隙間を全て塞いでしまえば部屋全体の遮音性能は格段に上がります。

しかし完全に密封状態になった部屋では窒息の恐れがあります。

家屋の廊下などに対して単体でも遮音性能が高く静粛性にも優れたロスナイを室内外の両側から「タンデム方式」で設置するとよろしいのではないのでしょうか。

部屋の遮音性能はこの換気装置の部分で決まってしまう。壁や床・天井の遮音性能をこれ以上上げて意味はありません。

なお、再生装置の場合と同様に、室内音響についても部屋を構成する部材の音響インピーダンスについて考察することは、好ましい室内音響を実現する上で有益だろうと思います。

プロローグ

ごく普通の日常生活の中で、様々な面で（勿論金銭的にも）無理をすることなく、良好な「音楽ライフ」を是非皆様に実現していただきたいものだと思います。それは「生活文化」になる可能性もあります。

「〇〇マニア」というと、やはりどこかで無理をしているように思えてなりません。それは生活文化として根付くことなく、おそらく一代限りで消え去る個人の趣味だろうと思われま

す。大げさな言い方かもしれませんが、この日本はいわば東西音楽の接点の場でもあります。多様な個性を持つ日本人がそれぞれ充実した音楽ライフを持つことは世界に対して誇れることなのではないでしょうか。

この拙文で述べたやり方で「成程！」と得心していただけることを心から願っています。音楽再生については実に様々な手法がありますが、ストーンと腑に落ちる体験をしていた

だと、他の手法の特徴もよく見えてくるのではないかと思います。「高音質」という言葉には何か麻薬のような妖しい響きがありますが、これに惑わされてはいけません。

強いて言えば、日常生活の中でごく普通にやりとりされる会話のサウンド、これこそが「高音質」の代表選手です。別にどうってことはないのです。

以上